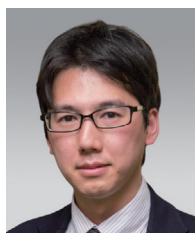


# コントロールできないことに悩まない



## 神谷和秀

大阪大学基礎工学研究科太陽エネルギー化学研究センター  
[560-8531] 豊中市待兼山町1-3  
准教授, 博士(工学).  
専門は材料化学, 電気化学.  
kamiya.kazuhito.es@osaka-u.ac.jp

<https://rsec.osaka-u.ac.jp/nakanishilab>

小2の長男のクラスが学級閉鎖になってしまった影響で、在宅でこちらの記事を執筆中である。働き方も生活スタイルも大きな変化を強いられているなか、本記事の執筆は自分自身を公私の両面から客観的に見つめなおす良い機会になった。このような機会をいただいた関係各位にまず感謝申し上げたい。

さて、高分子学会にかかわった経験が少なく、大変失礼ながらこちらの「先輩からのメッセージ—仕事と私事—」に関しても、執筆の依頼を受けるまで存じあげなかった。そこで、まずは先人に倣えということで公開されている過去の記事を拝見させていただいた。女性研究者の方々からの鋭い視点でのワーク・ライフ・バランスに関する記事や、男性研究者の方からは同じく研究者である奥様との二人三脚での子育てやキャリア形成に関する経験談など大変面白く、参考になる投稿ばかりである。とくに複雑なキャリアを積んだ経験もなく、共働きの大変さを理解しているわけでもない若輩者にとっては何を書いてよいか悩ましいというのが正直な感想である。

そこで月並みになってしまうが、私の自己紹介を兼ねた私事とモットーをご紹介させていただく（仕事のサイドに関しては高分子学会誌69巻8月号の解説記事<sup>①</sup>や研究室ホームページを参照されたい）。本稿の最初で話題に挙げた長男が生まれたのは、私が東京大学の助教に着任するわずか1カ月前であった。小学校・保育園教諭として勤務していた妻はこのタイミングで仕事をいったん辞め、育児は完全に妻任せになってしまっていた。しかし、方々から、仕事よりも育児のほうが圧倒的に大変だという声が聞かれるが、休日に1日子供の面倒をみるとまったくそのとおりだと実感する。当時の妻は専業主婦であったが、その仕事は研究より大変なのである。最近では若手の研究者から雑務が増えたことで研究に割ける時間が減った、という不満も多く聞くが、少なくとも1時間先に何をしているかといった予定は立てることができる。しかし、子供の気まぐれに振り回される育児では10分先の予定さえ立たない。予定が立たないことを楽しめる人が育児巧者なのだと強く感じる。私はその点はまったく正反対の性格で苦労した。

\*<sup>①</sup>は、会誌PDF版のSupporting Informationにハイパーリンクされています。

そのような状態が2年ほど続いたところで、妻の妊娠がわかった。双子であった。自分にも妻にも多胎児を出産した親戚はおらず、まったく予想していなかった。本郷三丁目の交差点を歩いているときに電話を受けたのだが、驚いて大きな声を出してしまった。双子の出産のタイミングも長男の場合と同じく、異動と重なった。それも今回は東京から大阪への異動ということで、生活環境も大きく変わる事となった。そこで、赴任後の一時は単身赴任での生活を選択し、妻と子供たちは実家にお世話になる事になった。その間に私のほうで、大阪での生活基盤を立ち上げる必要があった。家族が遠方にいる状態での、いわゆる保活や、家族が住むことをイメージした引っ越しは難儀であった。冷蔵庫を置く位置が10 cmずれたということで、電話越しに大喧嘩になってしまったこともあった。

晴れて家族5人で住み始めてみると、想定はしていたが、上の子がいる状態での多胎育児は困難の連続であった。夫婦ともに精神的に追い詰められていた、という表現も決して過言ではない状態であった。だが、この多胎育児の中で前述した予定の立たないことに対する悩みは、一種の諦めもあって達観できるようになった。これらの経験の中から、最近ではモットーを聞かれると「自分の立場や力ではどうしようもない(コントロールできない)ことに悩まない」と答えている。この考えは仕事にも役立っていて、自分が悩んでも仕方ないことと、注力すべきことの取捨選択につながっている。また、この考えを心療内科医の友人に伝えたと、メンタルヘルスの観点からもよい考えらしい。

その双子もこの4月から小学校に進学し、ランドセルを担いで小学校まで歩いていくことになる。不安と心配で一杯だ。友達にはできるだろうか、学校を好きになってくれるだろうか。コントロールできないことに悩まないと言いつつも、子供の成長に関する悩みは別枠なのかもしれない。彼らの健やかな成長を望まずにはられない。

とりとめのない文章になってしまったが、理解ある上司と、常にサポートしてくれる妻と子供達に感謝し本稿を締めたいと思う。